

## 【佳作】

## もしも死者に再会したら

松山 幸世（富山県 富山県立砺波高等学校 1年生）

「ツナグ」それは、一生に一度だけ死者との再会を叶えてくれる人だ。この本は、ツナグの仲介のもと再会した生者と死者の想いを描く、心の隅々に染み入る感動的な作品だ。この本の著者である辻村深月は、メフィスト賞や吉川英治文学賞、直木賞を受賞した。私がこの本を読んだのは、テレビで映画を見たことがあって、原作がどのような話か知りたかったからだ。

この物語は、ツナグを通して、死者に思い残したことがある依頼者たちが、その死者に会いに行く。私は、もしツナグが今私たちが住んでいる世界にいればよいと思う。なぜなら、何かを思い残したまま何十年も生活するのはとてもつらいからだ。私は、ツナグが実際に存在するのであれば、ぜひ会って、死者に会わせてもらいたい。しかし、一度しか死者に会えないので、どの人に会うかをよく考えて「ツナグ」を使いたい。

私がこの本の中で一番印象に残っているのは、「親友の心得」という話だ。演劇部に所属する嵐が同じ演劇部で交通事故で亡くなってしまった御園に「ツナグ」を通じて会いに行く。嵐は、演劇部に入部したときから役をもらえていて、三年生が引退した後の公演では、主役に立候補した。しかし、主役に選ばれたのは御

園だった。その後、嵐の思い違いにより、二人の関係は悪くなった。そして、嵐は御園が公演に出られなくなるように悪い事を考える。その悪い事をした次の日、御園は交通事故で亡くなってしまった。この場面を読んだとき、私は、嵐の気持ちがよくわかった。それは、私もそのような経験があるからだ。中学校のときに、テストの点数で友達に負けてしまったときに、相手の友達は何も悪くないのに、自分だけで勝手にイライラしてしまった。自分がしっかり勉強しなかっただけに、なぜか相手に対して不満を感じてしまった。これは、自分が負けず嫌いだから仕方ないことかもしれないが、やはり自分でもよくないことだと思う。

嵐は私と同じで負けず嫌いだと思う。この場面を読んだときそう思った。嵐よりも御園の方がかわいそうなのに、私は嵐の方をかばいたくなった。その後、嵐は御園に謝るためにツナグに御園に会わせてもらえないかと依頼した。そして、嵐と御園は会うことになった。しかし、嵐は御園と会ったときに、自分のせいで御園は死んだということを言うことができなかった。そして、真実を言うことができないまま、面会の時間は終わってしまった。

面会が終わった後、ツナグの言った言葉で嵐は、自分のせいで御園が死んだのではないことを知る。嵐は御園に会わせてほしいと言ったが、結局、会うことはできなかった。御園に謝ることができなかった嵐のことはかわいそうだと思ったが、それ以上に御園の交通事故が嵐のせいではなかったことに安心した。嵐が悪者にならなくてよかったと思った。初めは、なぜ御園は嵐に本当のことを言わなかったのかと不思議に思ったが、私は、御園が最後の最後で気まづい雰囲気になるのを避けたかっただけだと思う。御園にとっては、嵐との最後をよい感じで終わったが、嵐にとっては悔いの残る最後だったのではないかと思う。私も、このような

経験をしたら、きっと悔いの残る人生を送ることになるだろうと思う。嵐は御園の代わりに主役を務めることになったが、私は絶対に御園の代わりなんてできないと思う。

この本を読んで感じたことは、人間のさまざまな感情を上手に表現されていることだ。だから、共感する部分がたくさんあった。また、嵐が御園との再会を悔いの残る形で終わってしまったのを読んで、言わなければいけないことは、すぐに言いたいと思った。そして、悔いの残らないような人生を送りたいと思った。この作品は、自分と重なる部分があっても感動する作品だったので、自分を見直すことができた。この本を読んでよかったと思った。

書名…ツナグ

著者…辻村 深月